Osaka University Knowledge Archive

Title	内戦後の障害者の生活と復権 : スリランカ北部州ムライティブ県におけるフィールド調査の経験から
Author(s)	東田, 全央
Citation	響き合う街で. 2017, 82, p. 35-39
Version Type	AM
URL	https://doi.org/10.18910/70214
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

実践報告

内戦後の障害者の生活と復権

スリランカ北部州ムライティブ県における フィールド調査の経験から

東田　全央
（大阪大学大学院人間科学研究科）

１．はじめに

バイクの後部座席に乗り，街灯も家もない赤土のくねくねとした道を 10 キロほどひたすら進む．前方には現地 NGO のスタッフが別のバイクで先導してくれている．少し民家が見えてきたところでエンジンを止め，NGO スタッフは「空襲警報があった時に，みんなこの道に沿って逃げたんだ」と語った．別の日には，同じバイクで，細い橋を渡った（**写真１**）．「ここでは，政府軍の攻撃によって多くの人が亡くなったり障害を負ったりしたんだ」と．

1983（昭和 58）年からスリランカ政府軍とタミル・イーラム解放のトラ（LTTE） による内戦があり，2009（平成 21）年に政府軍が LTTE を制圧して終結した．その 26 年間の長きに渡る紛争から８年，障害者の生活と地域に根ざしたリハビリテーション（CBR：Community Based Rehabilitation）の現状について報告したい．

２．団体と実施地（ムライティブ県）の紹介

現地 NGO のワロッド（VAROD：Vanni Rehabilitation Organization for the Differently-Abled）は，2009 年以来，前身のカロッド（KAROD）から活動を引き継ぎながら，マナー県，ワウニア県，キリノッチ県，そしてムライティブ県から構成されるワンニ地方にて活動を行っている．

そのうち，今回の対象地であり，激戦地の１つであったムライティブ県は，2016（平成 28）年 10 月時点で，スリランカ国内で唯一，日本国外務省から「不要不急の渡航は止めてください（レベル２）」という安全情報が出されていた．未だに銃を持った軍人（シンハラ人）の姿が多く見られた．2004（平成 16）年のスマトラ沖地震に伴う津波でも多くの死者が出た．同県の人口は９万人ほどで，国内ではマイノリティのタミル人が８割以上を占める．私が話せる公用語のシンハラ語はほぼ通じなかった．

ワロッドはムライティブに 2012（平成 24）年より地域リハビリテーション委員会（CRC: Community Rehabilitation Committee）を設立し，2016 年 10 月現在，113 の CRC が活動中であった．５名の CBR ワーカーと１名のムライティブ・コーディネーターが主にこの地を担当していた（**写真２**）．

３．フィールドワークの経過と焦点

2016 年１月に，スリランカ出身でノルウェー在住の医師から連絡があり，ワロッドの事業評価に協力してもらえないかという依頼があった．青年海外協力隊での活動時（詳細は連載「CBR とスリランカと…」『響き合う街で』，2012～2015 年），北東部での活動の希望もあったもののほとんど関われなかったこともあり，

即快諾した．2016 年５月末に初めてワロッドを初訪問し，現地スタッフとの顔合わせ．基本情報の確認，今後の方針の確認を行った．

2016 年 10 月に第１回目のフィールドワークを現地スタッフらと実施．チーム構成はワロッドの CBR コーディネーター，ムライティブ・コーディネーターおよび CBR ワーカーと，ノルウェー在住の医師および私であった．渡航中にはさまざまな活動に参加しながらインタビューを実施した．主な焦点は生計支援プログラムを軸とした CRC のグループとしての活動評価，当事者や家族へのインパクトについての評価であった．

フィールドワーク期間中，CRC でのグループ・インタビュー（９か所，合計 118 人）と，個別インタビュー（９名）を行った．その他，現地スタッフらへの聞き取り，ドキュメントの収集等を行った．本報告では，そのフィールドワークの中での個人的な体験やエピソードを記したい．

４．現地の状況と課題

１）内戦と障害

内戦関連の障害の多さを痛感させられた．実際，爆弾，銃撃，拷問等により身体的な障害を負っている人と数多く出会った．たとえば，９か所のグループ・インタビューの参加者のうち，内戦関連の障害者は７～８割程度であった．一方，CRC では身体障害以外の障害を持つ会員が限定的であるように感じられた．プログラムとしては障害種別やその経緯は問わないことになってはいたが，知的障害，発達障害，精神障害のある人やその家族はわずか数名であった．障害の偏りの理由として，ワロッドの活動開始が内戦直後であったため，焦点が内戦関連に集中したことが推測される．また，ある参加者は「家族によってはそういった障害のある人を隠したい人もいるのは確か」と述べた．内戦関連障害は悲惨であり継続的な支援が必要である一方で，別の障害のある人に必要な支援をどう届けるかという課題があると思われた．

２）厳しい生活環境と資源

ムライティブ県はスリランカ国内の中で最貧困地区である．2015 年度の政府調査報告[1)]によると，人口の 28.8%は最低生活費（月 3,993 スリランカ・ルピー：約 3,000 円相当）以下の収入であり，一般的な生活状況の厳しさが推測された．あるグループ・インタビューの参加者は「ここは貧しい地域だ．……ただでさえ働く機会が少ないのに，障害があるとさらに厳しい．特に継続的な仕事を探すことがひじょうに難しい」と語っていた．

また，各地域には女性グループ等の地域のグループや，政府による一部の障害者への月 3,000 ルピー（約 2,300 円）の障害者手当があるものの，障害者が利用できる地域資源が限られているということがいくつかのグループ・インタビューで語られた．そして，CRC が重要な資源となっているということを多くの参加者が述べた．

グループ・インタビューでは，ほぼすべての語り手が，もっとも重要な課題として生計の問題を挙げた．これは，CRC

の実質的な活動の１つが生計支援プログラムになっていることもあり，その利用希望等を述べただけなのかもしれないため，地域課題かどうかを判断することは難しい．しかし，少なくとも参加者にとって,狭義のリハビリテーションよりも,生計の発展をニーズとして捉えていることは明らかであった．

訪問による個別インタビューでは，家族や親戚，近隣住民からの支援を受けながら障害当事者が最低限の生活を送っている状況が見られた．しかし，家族が仕事等により割ける労力が限られている場合に，障害当事者への関与の優先度が下がり，障害当事者が社会的活動に参加できないような状況も見られた.一方,元々,障害当事者が障害を持つ以前に主たる生計維持者だった世帯では，ひじょうに苦しい生計状況にあるケースも見られた．

３）CRC の機能と課題

CRC は，いわゆる CBR 委員会や当事者・家族会に近い形態で，障害当事者の参加の下に運営されていた（**写真３**）．その長所について，グループ・インタビューの何人かの語り手は,「１つのグループとして，それぞれの苦しい生計状況を改善し，発展させていくことができる」ということを明確に述べた．これは，CRC がワロッドの支援により,下記のようにマイクロクレジットの仕組みを導入して生計支援を行っていることが要因として考えられる．

いくつか仕組みの変遷はあるようだが,現在は CRC の中で５名程度の生計プログラム被益者をその CRC 自体が選び,１人当たり 50,000ルピー程度(約 38,000円）を貸付け，生計に関わる活動を開始することになっていた．多くの人が戦時下で職を失っており，その貸付を受けながら，小売店や養鶏（**写真４**），小規模縫製業等を始めることが一般的であった．被益者は毎月 2,000～2,500 ルピーを返済するとともに，未返済時にはグループが連帯責任を負うことになっていた．

個別インタビューでは，生計プログラムに参加することで，主要または補足的な収入を確保することができているとの声が聞かれた.聞き取りをした被益者は,一部の人を除き，生計プログラムに満足しており，ほとんどの場合で返済も何とかできている様子であった．

一方で，参加する人が限られている要因がいくつか散見された．身体障害があり単独での移動が困難な場合に，移動手段が確保できず物理的に来られない人がいた．その場合，代わりに家族が参加していた．他には，仕事や家事があって来られない人，参加すると本人と介護者が時間を取られ仕事ができなくなるため，参加できないという人もいた．

また, CRC と生計プログラムが一体のものとして機能している状況があるため,参加者の期待は貸付を受けることであるように見受けられた．実際，CRC に定期的に参加しない人の理由を聞いてみたところ，貸付を受けられないなど，実質の利益がないと分かると参加しなくなる，と語った．個人的な感触としては，これが参加の動機付けを左右するもっとも大きな要因となっているように思われた．

４）諸団体に翻弄される人々

CRC の参加者やワロッドのスタッフの中には，他団体や社会資源について語る人がいた．終戦直後の 2009（平成 21）年には海外からさまざまな支援団体が入り，物資供与をはじめさまざまな援助が行われた．多くの障害者が海外製と思われる車いすや支援機器を持っており，ほかの農村よりも質の高い物が導入されているという印象であった．当時は，支援団体間での「支援合戦」（competition）のようなものが行われ，現地のニーズに基づいていないと思われる過剰な援助実態もあったということが，数か所で聞かれた．

終戦８年後の現在は，障害者支援関係の団体も減り，当事者や家族の行政に対する信頼度も低く，「唯一の支援は CRC（またはワロッド）」と口にする人もいた．しかし，ワロッドの生計プログラムも海外のドナー（寄付団体）に依存している部分があり，ワロッド自体も今後の運営方針について再検討をしている最中であった．

５．考察

戦争・紛争は障害問題と密接に関連しており[2)]，しかも終戦後の影響も悲惨であると痛感したフィールドワークであった．そして，障害者は戦時下だけではなく，戦後においても社会的に周辺化されがちな状況に置かれやすいということを考えさせられた．

フィールドワーク中には，人々への精神的な影響も感じた．国内ではマジョリティであるシンハラ人への根強い反感があることもその１つである．私自身，シンハラ語で話すことは控えていたが，シンハラ語が話せることに対してあまり良い顔をしない人もいた．また，あからさまにタミル人とシンハラ人の優劣や，偏見と思われることについて語る人もいた．紛争がもたらした負の遺産とも言えよう．

戦争・紛争に限らず，生計や社会経済的なニーズというのは，とくに貧困地域では重大な地域課題である．一方で，経済的な支援のみが優先されることで，当事者のエンパワメントの障壁となりうるという潜在的な課題が垣間見えた．つまり，経済的な支援が途絶えた時，あるいは縮小した時に，崩れかねない脆い部分もあるのではないかと感じた．

私自身としては，スリランカでの青年海外協力隊としての活動時に北東部の活動に関わる機会がなく，何らかの形で関わることができればという気持ちがあった．今後も，現地の NGO とも連携の上，できることがあれば幸いである．そして，不安定な変わりゆく世界で，平和が維持され広がることを心から願っている．

文献

1) Department of Census and Statistics, Sri Lanka - DCS （2015）. The spatial distribution of poverty in Sri Lanka. Colombo: DCS.

2) Eide AH （2010）. Community-based rehabilitation in post-conflict and emergency situations. In E Martz （ed.） Trauma rehabilitation after war and conflict: Community and individual perspectives （pp. 97-110）.

New York: Springer New York.

本報告は下記の研究報告における第一著者の体験をもとに執筆した．Higashida M, Soosai J & Robert J (2017). The impact of community-based rehabilitation in a post-conflict environment in Sri Lanka. Disability, CBR & Inclusive Development, 28(1), pp. 93-111.

（本稿は著者最終稿である）